



22130115



JAPANESE A: LITERATURE – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Wednesday 8 May 2013 (morning)
Mercredi 8 mai 2013 (matin)
Miércoles 8 de mayo de 2013 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a guided literary analysis on one passage only. In your answer you must address both of the guiding questions provided.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse littéraire dirigée d'un seul des passages. Les deux questions d'orientation fournies doivent être traitées dans votre réponse.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis literario guiado sobre un solo pasaje. Debe abordar las dos preguntas de orientación en su respuesta.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

次の文章と詩のうちどちらか一つを選び、設問に沿って分析し、解説文を書きなさい。その際、二つある設問の両方に必ず答えること。

1.

隣家との境をつくっている長い木の塀の上を、小学五年生の一郎はひとりで行ったり来たりしていた。
(略)

「一郎、ちよつと降りておいで」

降りるのは厭だな、地面に降りるとロクなことが起こらないんだ、とおもいながら一郎はしぶしぶ塀
5 の上から離れていった。

一郎が塀や屋根や石崖の上が好きなのは、ひとつにはその場所なら安全だという気持ちなのだ。一郎は勉強が嫌いだし、先生も仲間の生徒たちも嫌いだ。どういうわけか、すぐに気持ちも話しくい違つてしまう。つまり学校へ行くのが嫌いなのだが、あいにく小学生の一日の半分以上は学校で過ぎてゆくことになっている。学校から帰ってくるといつても一郎は自分の心がすっかり萎なえていることを感じる。

10 まるで、心臓が箸の先でつまみ上げられた味噌汁の中のワカメの束のようだ。だから、ランドセルを部屋の中へ投げこむと、すぐ塀の上に登ってしまう。

さて、「ちよつと降りておいで」という声に一郎はしぶしぶ塀を降りて、父親のまえに立つた。

「明日、船に乗って大島へ連れていってやるぞ。三原山に登ってみよう」

父親のその言葉は、一郎を興奮させた。(略)

15 夏休みの旅の目的地としてこの上ない場所だ、と一郎は思う。しかし父親と一人きりの旅だとすれば、ちよつと迷惑な感じもある。「何だつて、そんな珍しいことを思いついたのだらう」と、一郎は思う。

「お母さんは一緒じゃないの」

「お母さんは、^{たぐ}軀の加減がわるいから、家に残るんだ」

と、父親は答えた。

20 一郎の視界のなかに、父はめつたに居ることがない。そして、たまに父と向かいあっていると、一郎は動かし方の分らない機械の前に坐っているような気分に襲われることがある。

たまたま家の中に姿をあらわした父親が、不意に烈しく一郎を叱りつけることがある。一郎には、どう考えても叱られる筋道が分らないのだ。「ぼくには何も叱られる理由がないのだ」と一郎は、恐ろしさを我慢しながら、抗議の言葉をわめくこともある。しかし、そういうことが度重なってゆくうちに、

25 一郎はしだいに理解しはじめた。つまり、叱られる理由が何もないというところに鍵を探さなくてはならぬということ。父親の側から放射される怒りの波は、一郎を直指して押し寄せてくるのではなく、たまたまその道すじに一郎がいて、その怒りの波につき当たってしまう場合が多いこと。だから、父親の身のまわりに子供の頭でははつきり了解できない現象が起こつてもさして不思議におもう必要はない、と一郎は考えるようになっていた。(略)

30 汽船が岸壁を離れてまもなく、一郎父子二人だけのはずの船室に若い女が入ってきて、父親の傍にすうと坐つた。唇がひどく赤くて、白いレースの手袋をしていた。美人だとおもつた。父親は機嫌が良くて、一郎とその若い女とを食堂に連れて行つてくれた。(略)

一郎父子と一郎には未知の若い女を乗せた汽船は、島の船着場へすべりこんだ。

35 宿屋が並んでいる場所に近づくと、若い女は別の宿屋に入ってしまった。一郎が父親と晩飯を食べ終
わったとき、宿の若い女将が部屋の入り口にきちんと坐って挨拶の言葉を述べた。一郎がハッと目を見
張ったほど美しい婦人で、浅黒い細面に紺緋の着物が匂うようだ。一郎が自分の胸にうけた感動を、
何かの形で表現したいとあせつたりためらつたりしているうちに、父の声が傍からさりりとした調子で
こう言った。

「奥さん、とてもお綺麗ですね」

40 「そう、そう言えればいいわけなんだが」という先を越されたような気持ちと、「ずい分欲張って
いるな」という気持ちとを同時に覚えて、一郎が父親の方に眼を向けると、そこには一人の青年の横顔
があった。

その横顔は、抵抗できぬ美青年のものとして、一郎の眼に映ってきた。

45 まったく一郎の父の年齢は若かった。異常なまでに若い。一郎が生まれたとき、父親は数え年十九歳、
母親は十八歳であった。

一郎が小学校の下級生になったころ、母の年齢はともかく、一郎より若い父親を持った生徒は皆無で
あった。一郎はそれが自慢で、級友の誰彼となく掴まえて、「きみのお父さんは、いくつだい」と訊ね
た。相手は例外なく、一郎の父親の年齢より多い数字を答えた。すると、武者修行に勝った武士のように、
一郎は得意になった。

50 ところがその気持ちは年を加えるにつれて変わってきて、一郎はその話題を好まなくなっていた。
先年までは、時折、父と一緒に食事に行った店などで、女給や女中などが「お兄さんは……」
と父親のことを一郎に訊ねたりすると、「ちがわい、お父さんだい」と訂正を申し込んだものだ。
しかし、近頃では、そのような場合には一郎は黙りこんでしまうことにしていた。

55 だが、大島の宿屋ではちがっていた。その夜、一郎が便所へ行くためにながい廊下を歩いていると
あの若い女将が不意にあらわれて、「坊ちゃんのお兄さんはね……」と話しかけたのだが一郎
はそのとき冷たい調子で、「ちがうんだよ、僕のお父さんだよ」と答えたのだ。

このように、一郎は大そう早熟であったが、肉体に関してははっきりした知識を持っているわけでは
なかった。肉体に関しては、漠然とした小さな波立ちを感じるだけであった。

(吉行淳之介『夏の休暇』一九五五年)

(a) 比喩表現はどのように用いられ、又この文章の中でどのような効果をもっていますか。

(b) この抜粋文の中で、一郎父子の関係はどのように描写されていますか。

2.

葬式列車

なんという駅を出発して来たのか
もう誰もおぼえていない
ただ いつも右側は真昼で
左側は真夜中のふしぎな国を
5 汽車ははしりつづけている
駅に着くごとに かならず
赤いランプが窓をのぞき
よこれた義足やぼろ靴といっしょに
まつ黒なかたまりが
10 投げこまれる
そいつはみんな生きており
汽車が走っているときでも
みんなずっと生きているのだが
それでいて汽車のなかは
15 どこでも屍臭がたちこめている
そこにはたしかに俺もいる
誰でも半分はもう亡霊になって
もたれあつたり
からだをすりよせたりしながら
20 まだすこしずつは
飲んだり食ったりしているが
もう尻のあたりがすきとおつて
消えかけている奴さえる
ああそこにはたしかに俺もいる
25 うらめしげに窓によりかかりながら
ときどきどつちかが
くさつた林檎をかじり出す
俺だの 俺の亡霊だの
俺たちはそうしてしよつちゆう
30 自分の亡霊とかさなりあつたり
はなれたりしながら
やりきれない遠い未来に
汽車が着くのを待っている
誰が機関車にいるのだ
35 巨きな黒い鉄橋をわたるたびに

どろどろと^{はじょうた}樞柩が鳴り
だくせんの亡霊がひよつと
食う手をやすめる
思い出そうとしているのだ
40 なんとこの駅を出発して来たのかを

(石原吉郎 『サンチヨ・ペンサの帰郷』 一九六三年)

(注)

屍臭 死臭と同じ

- (a) 作者はどのような思いでこの詩を綴っているとおもいますか。
- (b) この詩の雰囲気や文体の特徴について述べ、それがどのような効果をもっているか、考えるところを述べなさい。
-